7・10 感動のパラリンピック！に オブジェクション！！

1998年3月8日、長野市で以下の「呼びかけ」を趣旨とする「集会」がおこなわれた。

私たちはそれを愛といっていいのか？
私たちはそれに感動していいのだろうか？

去る2月22日、「愛」と「感動」のうちに長野冬季オリンピックが閉会した。

そして今また、より純度を高めた「愛」と「感動」を引き継ぐ形で、長野パラリンピックが3月5日から開催されようとしている。

しかし私たちは「愛」と「感動」の過剰な演出が、祝祭的なオリンピック・ムーブメントの過程を通じて能力主義や差別性を不問にしていることを、今ここでしっかりと確認しておかなければならないと考える。逆に、国家の意図であるオリンピック・スポーツの推進は、その本質において能力主義や差別性を内包するがゆえに、それを覆い隠すために「愛」と「感動」を言わなければならないのではないか、ということを提起したいと思う。

私たちの社会はよく「競争社会」などと言われ、多くの人にとっても、そういう社会はよくないと考えられてるが、未だ競争に代わる新たな原理を持ち得ないでいる。そればかりか、競争に負けた人または、そもそも競争社会から排除された人を「弱者」として自らの強者性に対置して、「愛」をもって救済することで、自らの差別を覆い隠し、結果的に「競争社会」をより強固なものとして補強してはいなか。

私たちが、オリンピックやパラリンピックのどこかしこに「愛」や「感動」を見つけたとき、その「愛」や「感動」が、学校や職場などの「競争社会」や、施設や病院に閉じ込められたままの障害者の日常生活（しかも彼等は社会復帰と称して不断に健常者に追い付くことを強要されている）を何ら喚起しないものである限りにおいて、私たちは純粋であり、無責任であるといえる。私たちが、手や足のない選手に、愛と感動のエールを送ることと、職場で効率の悪い働く仲間をどなりちらす、またはどなられることとの間に、何の違いがあるのか。

オリンピック・スポーツに見られる現象は、それ自体がスポーツであることから、日常的な社会生活とは関連が無いように意識されるが、有名なオリンピックのスローガン「より早く、より強く……」を思い起こすやいなや、それは普段の私たちの生活、例えば、職場や学校の原理となっていることをうんざりしながら想い起こしてしまうだろう。生産を優先させる社会にあっては、障害者は効率の良くないもの、非生産的なものとして下位に位置付けられている。

そしてこの序列化は、障害者を社会のお荷物として認知させ、その一方で、あらゆる場面で健常者に追い付くことが障害者の生きる証であるといわんばかりの傾向を作り上げ、それを強要されている。すなわち、人間への差別、抑圧、競争は、私たちの「競争社会」の最下層で最も激烈で過酷な形で現われているということを、ここで再度思いかえしておきたい。

「より強い人間」への志向は、ひとつの道筋として、競争原理にもとづくオリンピック・スポーツ（近代スポーツ）の世界的伝播によって確立されようとしている近代における普遍的人間観であろう。より強い人が、より美しい人が、より早い人が、かくもかように素朴に、世界規模で賞賛される傾向は、同時に、よりダメな人、より劣った人を発見し、その序列の最下層に位置付け、固定することに他ならない。ヒューマニズムが、「理性・知性」を尺度に動物から人間へ上昇する序列を生み出してきたのと同様に、オリンピック・スポーツは、そうした人間観を確立するのに一役もニ役もかってきた（ベルリン・オリンピックを見よ！）。能力主義による人間の序列化は、人間を選別するという意味において、人間の紐帯を引き裂き、関係性を分

断する。

私たちが分けられてはいけないとするのは、私たちの生の確信が関係性の中にしかないからであり、よくもわるくも、人にまみれて生きることのダイナミズムを信じるからである。人間能力の数値化や記録化の傾向が、人は発達し続けなければならないとする、近代の抱える病であるということ、そしてそれ以上に、「より劣った者」を生産しつづけることによって、一方を差別し、排除するものとしてあることを、いま私たちは自らに問いかけなければならないだろう。

友よ、あなたと私が友達であるという根拠を失わないためにも、
オリンピックやパラリンピックに感動してはならない！

「感動のオリンピック？　ふれあいのパラリンピック？」のタイトルでおこなわれた長野パラリンピックに反対するこのシンポジウムは、「頑張る障害者やパラリンピックに反対とは何事か！」と多くの非難や咎め立てと、数少ない強い賛同を集めて、その時代や社会に問いを向けた。

それから20年以上がたった今、この「呼びかけ」で問われた人間関係、仕事や暮らし、生産や教育や福祉の現場、現実の数々、そして「愛」や「感動」の在りか、友との関係の根拠は、果たして希望の持てる方向へと向かってきたのだろうか？いま東京オリンピック・パラリンピックが予定されているのは、人々が仕事や生活の困難さどころか「いのち」の危険さえ感じ、社会の分断がさらに強まり、僅かな尊厳や表現の自由などが危機的な状況となっている新型コロナ感染拡大の真只中である。「感染予防」社会は、まさに「優れたいのち」と「劣ったいのち」の選別を極めてソフトに、また「健康や安全」の危機を煽りながら深く進行させていき、20年前には無かった多様性や共生や包摂やそしてSDGsなどの言葉が日常の至るところに見られる世の中になりながら、実際の現実はそれらの言葉を真っ向から裏切る事態で、ましてや20年前の問いは今でも「有効な問い」として成立してしまう辛く貧しい社会そのままである。

なんと無残な20数年だったのかと嘆きたくなる思いは棚上げし、いままたここで「問い」を明確にし、具体的で有効な実践を確認し、この状況だからこそ僅かずつでも希望の持てる現実を創っていく契機としたい。

20数年前に「重度の身体障がい者」として発言者の一人であり実行委員会のメンバーでもあった橋本和子さん、ゲストとして「愛と感動のゆくえ」をテーマにオリンピックファシズムについて講演していただいた当時京都大学教員の池田浩士さん、この2名が再び登場して2021年は、

「感動のパラリンピックにオブジェクション！」

内 容：

1.　　発　言 --- 橋本和子さんから

2. 講　演 --- 池田 浩士さん（京都大学名誉教授）
「パラリンピックとボランティアはファシズムとともに」

3. 会場と --- 参加者とのトーク ほか

（主催）　感動のパラリンピックを考える会　　オリンピックの中止を求める松本の会